

## 「好き」は宙に舞う

明治大学付属明治高校 2年 横山 奏

「すき」

やつと言っことができた、目の前にいる優香に向かって。

優香はこっちを見ただけで表情は何も変わらなかった。彼女の大きな瞳の中で彼女とはとても釣り合わない僕の姿が映りこんでいる。そんな僕の姿を見たくなくて、そして何より優香の視線に反応して僕の体中の毛穴から熱い湯気が出てきそう、僕は彼女から視線を外す。

「どうしたの、初めてだね、そんなこと言うの」

優香は僕の頭をやさしくなでる。僕は優香をこんなに簡単になでたり、触ったりなんてできないのに。こんな優香にとってはなんてことない行動でも、僕と彼女の違いはあつという間に形となつて現れる。

「私も好きだよ」

優香のいつもと変わらない笑顔が、彼女が僕の言った「すき」の意味を理解していないことを物語る。やつぱり伝わらなかつた。想像通りの結果だと思つた。が、この時初めて、心の奥底で一丁前に期待していた「人」がいたことに気がつく。僕はこいつをすぐに切り離し、閉じ込めた。こんな奴を放し飼いにしていたら僕まで自分の立場を忘れそうになる。改めて諦めの感情に包み込まれた僕は優香に言いたいことをゆつくり言葉にしていく。僕の好きは、そんなか弱いものを見るような視線とともに伝えるものじゃない。もつとこつ、胸のあたりから熱い雲みtainなものがかぶわぶわ出てきて体中に広がっていくような、そんな…。伝えようと思つたけど、うまくいく気がしなくて、ただ黙つた。無理矢理閉じ込められた人は悲痛な叫びを上げている。

優香はまだ僕を撫でてくれている。彼女の手はさつき閉じ込めた人も含めて、僕全てをすっぽり包み込んだ。この手に自分をゆだねて、何も考えず彼女との時間を楽しめたらどれだけ幸せだろう。悲痛に叫んでいた声がだんだん弱くなつていく。でもやつぱりこのまま彼女の中で何もなかつたことにされるのは悔しくて、僕は閉じ込められている人に言い聞かせる。優香にどうにか想いを伝えないと。彼女にとって僕みたいなやつなんていくらでも代わりは用意できるとだから。

「ねえ、もう一回言つてよ」

今度は僕の前におやつを持ってきた。僕が大好きな味。優香はこれを食べないので、いつも僕のためだけに用意してくれている。

この優香の動作がきつかけで、嘆きの声はさつきよりもおおきくなる。いや、いつのまにか僕は閉じ込められた人に寄り添っていた。最初にあつた時から優香は僕のすべてで、僕は優香なしでは生きられない。そして優香もそれを知っているはずだ。そこまでわかつているのに何で

僕の「好き」は理解してくれないんだ。このおやつだつて、まるで僕の機嫌を取りに来ているみたいじゃないか。もはや閉じ込められている人と一緒に僕も叫び出したい気分だった。

でも優香からおやつをもらえるのはやっぱりうれしくて、僕はそれをカプ、とほおぼる。優香はそれを満足げに見届けると、僕の声を待った。僕はもちろん言わない。今言っても優香には「声」しか伝わらない。

「なんだー、言ってくれないの」

だつて僕が優香にささげたいのは、声じゃなくてそれに入っている想いなんだ。閉じ込められた人は僕の中で唯一想いを真正面から抱えている、だからこんなにも辛い声で叫んでいるのだ。君がこの想いに気づいて、受け入れてくれるまでいつはずつと閉じ込められたままだ。心の中でも、外でも僕がまるつきり自由に動けるかは、君が鍵を握っているんだ。

そのとき、優香の腰のあたりから騒がしい音が鳴って、僕らがいる空間をあつという間に支配した。

「あ、ちよつと待つてね、ピーちゃん」

優香は僕に向かってほほ笑むと、僕を片手で包み込んだまま、腰から何かを取り出し、まぶしく光る部分を見た。優香のほつぺたがふつとピンクになり、口がきゅつと上に上がる。そして湿つた息を多めにはくと、光っているところを彼女の耳に当てた。

僕は優香の手から飛び立つ。このままだと僕はみじめでみじめでしょうがない気がしたから。この空間には僕と優香以外、誰もいないはずだ。それなのに、優香は僕以外の誰かに向かって最高の花束にも劣らないこの笑顔をささげている。

「好き」

優香はこの言葉を口にした。優しく、少し湿っぽくて、柔らかい。耳から入ったら解けてしまつようなこの言葉を最初に聞いた瞬間、僕が持つ優香に対する気持ちを表すことができるものだとなった。だから言えるようにしたんだ、君に伝えたくて。

「すき」

もう一回言つてみる。優香はこっちに近づいてきて、僕の羽のあたりをすつとなでるとすぐに背を向けてしまった。

やっぱり優香は僕の声しか受け取ってくれない。「すき」という声に気を取られてしまつから、声に乗せた「好き」という想いに気がつかないのだ。

「好き」という想いを抱えた人間みたいな僕の一部はまだ閉じ込められたままだ。いつか優香がこいつを抱えた想いに気づいてくれるまで、僕は優香と同じ地面に降り立ち、歩みだすことはできない。